

## 学問と原体験：川本和良先生を囲む座談会

出席者：川 本 和 良（経済学部教授）  
 末 川 清（文学部教授）  
 坂 野 光 俊（経済学部教授）  
 山 井 敏 章（経済学部助教授）  
 司 会：松 野 周 治（経済学部教授）

### 原 爆

松野 今日、来年の三月で定年を迎えられる川本先生を囲んで、いろいろお話を聞かせていただこうと、企画致しました。川本先生ご本人のほか、先生とずっと親交のあられる文学部の末川先生、そして経済学部からは、長い間の同僚であり、川本先生と同じドイツ、ただしドイツの現代経済を研究なさっている坂野先生に出席していただき、そして経済史の方から山井先生と、私、松野が聞き手をつとめさせていただきます。学問、人生についての先生のお考えなど、ざっくばらんに話しただければと思います。

山井 一昨年でしたか、先生のお父さんが亡くなられたとき、ご葬儀の最後に先生が原爆のことを話されましたね。今から思えば父は戦友だった、とおっしゃったように記憶しています。広島原爆で亡くなった妹さんのご遺体を、川の畔で二人で焼いたんだ、と。たいへん印象的なお話でした。原爆のことを、先生はほとんどお話にならないのですが。

末川 川本さんの被爆体験というのは、長いおつきあいですが、ほとんどじかに聞いたことがありません。おっしゃらない。ただね、グローテというドイツから来た青年がいましたでしょう。そのグローテさんを囲んでドイツ語の会話の練習をしようとしたことがありました。その時グローテさんに川本さんが、自分は被爆者であるとおっしゃった。閃光が走ったかと思うと地面に叩きつけられていた、というようなことを話されました。川本さんの被爆体験を聞いたのは、その時が初めてだったように思います。やはりこの体験というのは、川本さんのその後の人生観を形成するうえで、大きな意味をもっていたように思います。一度生死の境をさまようようなところをくり抜かれたということから、かえって学問に打ち込まれたのではないのでしょうか。

川本 打ち込んでないですよ（笑）。僕は偉い人間じゃないんで、僕の話など後に残す値打ちなどないと思ってますし、また残すべきではないと。それに〔座談会の主催団体である〕経済学会から、怒られるかもしれない話しかできません。だけど、定年退職にあたって皆さんのご好意で企画されたことで、何度もお断りはしたんだけど。

原爆については、今年がちょうど被爆の五十回忌ですね。来年が敗戦五十周年になるわけです。自分を語る意義がないと言いましたのは、学問の世界に入ったについても、私にはほとんど理由らしいものがないから。ただ、やはり学問は人生の一部だと思いますし、人生に対する考え方によって学問が規定されると思います。私の人生に対する考え方の起点にはやはり被爆体験

があって、これは被爆者一人一人それぞれの人生ですから考え方も全部違ってのわけだけど、私なりの考え方があって、その人生の一部として学問があるという形ですね。

被爆体験、被爆そのものについては言いません。これは文学や絵などいろいろな作品がありますし。私としては、被爆に限らないと思いますけど、現世のなかには表現できないことがあると思うんですね。自分の能力を超えて到底表現できない世界というのがあって、要するに経験した者でないと分からない世界があると思います。語っても無駄だという思いと、結局自分の運命は自分で担うよりほか仕方がないという諦観がありまして。

ただ、そこでどういった考え方が出てきたかといいますと、やはり一つはヴェーバーの言う、意図と結果とは往々にして逆である、それが人間の運命だ、というのを感じました。私には妹がいたんですが、もう二、三年戦争が続いていたら、私は第一線に出て死ぬ運命にあったわけです。しかし妹は女だから生きる、というように考えていました。ですから私は死ぬ者として、妹も食べるものを節約して私にくれました。しかし結果としては、死ぬはずだった私が生き残って、生きるはずだった妹が死んだ。

与えられた条件のなかで、経験に即してどうなるかっていうことを予測しながら行動することは、人間にとって大切なんだけど、しかし、人間の考えることなんてどうせ浅はかなことだというのが、私の基礎経験にあります。この世の由無し事すべて神様の気紛れで決まる、というのが私の結論です。

生きることに対して負い目があって、生きてていいのかというのが絶えずつきまとっている。一種の厭世観があります。戦後、サルトルの『嘔吐』とかカミュの『異邦人』とか、それからここに太宰持ってきたけど、『斜陽』とか『人間失格』とか。『人間失格』は三号にわたって『展望』に載ったんですけど[雑誌『展望』の当時の号をとりだす]、その「人間失格」の三の最後の方に、「今自分には幸福も不幸もありません。ただ一切は過ぎていきます。自分が今まで阿鼻叫喚で生きてきたいわゆる人間の世界において、ただ一つ真理らしく思われるものはそれだけでした。ただ一切は過ぎていきます」という言葉がありましてね。私もこんな気分ですね。世の中には幸福も不幸もなくただ時間が過ぎ去って。結果的には死ぬまで生きたしょうがない、というのが私の人生観です。太宰のように自殺するには勇気がいる。自殺する勇気がないから。

山井 僕はつねづね、先生は矛盾だと思ってるんです。今おっしゃったような厭世観、先生はたしかに強烈な厭世観をお持ちで、そういうことをしょっちゅう言ってらっしゃる。にもかかわらず、先生には驚くべき好奇心と貪欲の固まりみたいところがあるでしょう。お宅の蔵書にしても、あんなに本があってよく家がつぶれないなと思うような。しかもそれが、先生の本来の関心とは逆のようなものまでかなり含みますね。本だけじゃなくて、先生の好奇心はあらゆるところにとんでもなく広がっていきますね。

川本 要するに、末川さんなんかもそうだと思うけど、食べものを残すのもったいないわね、物を捨てるというのがもったいないでしょう（笑）。だからため込むでしょ。そうすると置く場所はなくなってくる。

それと、これはハイデッガーの正しい解釈かどうか知らないけど、要するに人間というものは、ある与えられた具体的な環境のなかにある日突然に放り出されてね、ゲヴォルフェネス=ダーザイン【投げ出された存在】だっていうね。人間というのは、生れてくるにあたって、そもそも何

ら選択の余地は持ってないわけで、これも神さんの気紛れでしょうけど、ある日突然に特定の遺伝子を持って、特定の具体的な環境のなかに放り出されてくるわけですね。その環境がどういう環境であるかということは、本人には選ぶ余地はないわけですから。モザンビークかどこかの餓死するような家庭に生まれてくるか、日本のこんなぜいたくな家庭に生れてくるか、そんなことは本人のあずかり知らぬことでね。それで生きていかないとしょうがない。自分なりに生きていくよりしょうがないんで。そして、人はただ1人で死ぬ。死は何人にとっても身替りに立ってもらうことはできないでしょう。

一人一人の人生はそれぞれみな一回かぎり、しかも私なんかは非常に不公平だと思うけれども異った環境に加えて、先天的な遺伝子が一人一人みな異っていて、一人として同じ人間はいないということね。

人それぞれの人生である。僕はヒッシュ [ドイツのリート歌手] の「冬の旅」が好きだな。人生いうのは個別者、例外者として、ただ一人冬の旅を続ける。自分の運命は自分で背負って生き、死んでいかんとしょうがない。

坂野 山井さんが矛盾の塊だと言われたけど、まあ人間みんな、そういう矛盾の塊みたいなどころがあるんだろうと僕は思うんですが、川本さんが、生きることには希望も持っていないようなことを発言されるわけですね。だから、こんなところで語る資格なんかないと。にもかかわらず研究にしても、教育にしても、学内行政にしても、主観的意図のレベルではしょうがないなと思ってやられたんでしょうけど、客観的にというか、まわりからするとよくやられてるわけですよ。

こういう言い方があたってかどうかわかりませんが、我執というか、たとえば名誉欲のためにこれこれするとかいうのが無いことが、はたから見ると一生懸命されているという状況を作り出したという感じがしますね。居直るといってちょっと語弊がありますがけれども、その辺のところにはこだわりがないからやれたんかな、という感じがします。

川本 ここに『孟子』と吉田松陰の『講孟餘話』を持ってきたんだけど、『孟子』の卷第十三盡心章句上の一に、「殀壽貳（ようじゅうたが）はず、身を修めて以て之を俟つは、命を立つる所なり」とあります。松陰でいうのも変わった人間で、野山獄、私見しましたが、野山獄に入ってから、寝食を忘れて勉強し、勉強すると人に教えたくなるんだな、獄中で囚人に対して。それが『講孟餘話』です。『孟子』のさっきのところに松陰はこう書いてます。「殀壽は命の短長なり、命の短長において疑貳の心を生ぜず、唯々身を修めて以て之を俟つとて、吾が心力の及ぶだけは盡して、其の餘は命に任せ置くなり。然れば命を立つるとて、命を人為を以て害するに至らず。」

要するに吉田松陰は、人事を尽くして天命を待つ、ということをごここで解説してるわけですがけれども、まあ私流に言えばですね、死ぬまで生きんとしょうがない、いつ死ぬかわからない。人それぞれの生き方で生きて行って、死ぬときは死んだらいい。それが生きている証拠だと。それが立命のいわれだと思って、ある意味で立命という言葉にもつながる生き方だと。ちょっと強引かな。

坂野 一つお聞きしたいのですが、さっきから言われている、まあ、とにかく死ぬまで生きるしか仕方がないという人生観と、学問や教育についての考えとの関連です。たとえば今のような人生観が、教師としての仕事に何か特別なものを与えたというようなことはありましたか。

川本 教育への考え方といっても、大学教員になったのもまったくの偶然で、典型的なデモシカ教師ですよ。私は広島的高等師範の地歴から社会科を卒業しましたんで、京大の経済に入ったときに社会科の教師の免状を持ってましてね。新制になって社会科というのが新設されて、社会科の教師が足りないからと、高師の同期生で京都女子高校に勤めてる奴から手伝いに来いと引っ張りだされて、京女で教師やってたんです。53 [1953] 年に卒業した時は、新制と旧制の学生が同時に卒業したり、朝鮮事変の特需が崩れたりして、今どころの騒ぎではなしに、全然職がないという状況でした。そこで大学院に進む一方、まあそれまでの成りゆきで同時に京女の正教員になったわけです。

大学院は、これは旧制ですから全然義務がない。願書出して放っとけばいいわけね。4月に豊崎 [稔。指導教官] 先生のところに行き、授業料免除のための判子をもってそのままいました。その時に立命で特研究生 [特別研究生] を募集してまして。朝日新聞に募集の記事がでて、42人ぐらい応募があったんですが、西洋経済史と経営学を一人ずつとる予定だったのですが、結局私1人が西洋経済史で通りました。まあ立命に縁があったという他ないと思いますが、それからずっと今日まで勤めたということです。大学教員になれば、浮き世の掟にしたがって教師としての仕事をしないとしょうがないということだね。研究、教育、学内行政、対外活動というのが大学教師の仕事ですから。生きてる限り、ここにはまったらしょうがないからやってきた。

研究者としてはもう僕は怠惰ですし、そんなに好きじゃないしね、だいいち。研究も教育も学内行政も全部嫌いですよ。嫌いだけどうしょうがないからやってるだけで、ほんと。肥前 [栄一。京大大学院の後輩] 君なんか見ると、ほんと研究好きでね。三度の食事より好きでしょう。ああいうのを見てたら僕はほんと好きじゃないな。だからたいした研究成果もあがってないし、座談会なんかしてもしょうがないんだよな (笑)。

## 敗 戦

松野 被爆体験から立命館でのことまでお話しいただいたんですが、もしよろしければ、京都大学の経済学部や大学院の思い出などありましたら。

川本 はあ、別に何もありません (笑)。一つには、[昭和] 25年に旧制最後で経済学部に入ったのだけれど、倍率が1.7倍でね。合格したら今年は落ちる方が難かしいんだと言われた。それに鳥飼総長が外国出張中で、滝川 [幸辰] さんが入学の辞を言われたんだが、今年は旧制最後で例年250名を300名とって、少し多くとりすぎた。それに今年の諸君は英語ができない。敵性語として教えてもらわなかったんだもんなあ。とにかく入る時から変だった。歓迎されていないんだよなあ。大学院は要するに籍を置いておけばいいわけで。京女の方は正教員でしたから。こっちの方の思い出としてあるのは、天皇事件ですね。[昭和] 26年頃でしたか。

末川 天皇が京大に来て、これを学生たちが「平和の歌」で迎えた。

川本 京女に勤めて間がない頃で、松の木の上に登ってわいわい見とったわけよ。明るる日になって生徒の前でね、天皇制はけしからん、天皇はけしからん、ということをやったら、父兄から文句が出てね。

坂野 ああ、京女でしゃべったわけ。

川本 生徒にしゃべったわけじゃ、天皇はけしからんと。だって、天皇のために死ぬと俺は言

われてきたんだもん。沢山の人がそれで苦しみノタうちながら死んでいったのを見たんだもの。そいつがこのこやってきてやな、あれはけしからん奴じゃと言うほかあらへんがな。そしたら物議を醸してね。生徒の前で謝らされることになったんだけど、俺は謝らんと行ってね。そしたら、一緒についてきてくれた人がいろいろと話してね。結局俺が批判したのは天皇個人ではなく、天皇制についてだということになりました。そういうこともありましたね。天皇制、とくに天皇の戦争責任について語ることは今でも生命がけで、タブーですね。困った国だ。

まあ、京女時代は教師の仕事が忙しかった。大学院では当時、豊崎先生が指導教官だったんですが、大野【英二】先生のところでドイツの研究やってました。その頃から末川さんとは一緒にしたね。『ビヒモス』読まされてましてね。あれは膨大な英語の本で、全訳のノートが六冊ぐらあります。その後ナチについていろんな研究が出ましたけど、見方が違うとか知らないところが補強されたというだけで、大きなところはここで出つくしている印象ですね。あれは実に経済だけじゃありませんから。政治も社会も全部ひっくるめた壮大な本でね。

山井 丸山真男さんでしたか。留学するときに『ビヒモス』を持って行って船で読んでたというのは。

川本 あれはすごい本ですよ。

山井 先生は書評を書かれましたね。

川本 うん、書評を書いた。あれは苦労したけどな。

山井 僕らの世代になると、もう翻訳で読むようになってますね。

川本 あれ英語でしょう。それでね、原語がわからないわけ。ドイツ語の役職とかが全部英語で翻訳されて出てきますので、それがドイツ語で何にあたるのかわからない。ナチのドイツ語の用語集みたいなのが出て、それで想像つけながらやってたんだ。

山井 ちょっと話を戻しますが、さきほどハイデッガーの名前が出ましたね。実存主義というのは、先生にとってはいわば絶対的な意味がありますよね。もちろん僕もキェルケゴールやサルトルは読みました。ただ、先生みたいな受けとめ方は全然してないわけで、川本先生と比べればやはり教養の一部として読んだだけという気がします。末川先生にとっても、ああいう哲学の意味はやはり大きいわけですか。

末川 僕には川本さんみたいな激しい体験がない。世代的にちょっと後です。昭和20年、終戦の年に中学に入ったんですね。そして23年に新制高校が発足し、新制の鴨沂高校に入ったということで、激しい戦争の体験といったものがないわけです。戦後民主主義を素直に受けとめるという形で、高校時代を過ごしてきたわけですね。あの当時の新制高校の雰囲気というのは本当に自由でね。伸び伸びして、自治活動も盛んだったし。そういうところを満喫していた方ですね。あまり実存とか、人生の問題とかいったことを深刻に考えるということはなかったですね。やはり川本さんの方が実存哲学とかに……。

川本 だって末川さんは山本富士子とか田宮二郎とかと一緒にやろ（笑）。山本富士子見てたらね、厭世的になろうと思ってもならへんが。

末川 戦後の「青い山脈」の時代ですね。山本富士子は1年上、田宮二郎は小学校の2年下だったかな。

坂野 やはりそうでしょうね、かなり近い世代であっても、原爆とか実際に戦地に行っている

とか、そういう経験をするかしないかですらぶん違ふと思いますよ。

川本 われわれでも一つ二つ違ふだけで、経験はずいぶん違ひます。

山井 先生は原爆を受けられて、末川先生とか坂野先生は戦後民主主義の息吹を吸われて……。

川本 ちがうちがう。あれは満州からの引き揚げで命からがらですよ。

坂野 いや、僕も戦後民主主義のね、アメリカ民主主義と言ってもいい、そのプラス面をもちに受けたんですけどね。それでも僕には、やっぱり引揚者の体験というのが一つあると思います。

川本 そりゃ大変だと思いますよ。

坂野 同じような世代でもね、ずいぶんいろいろ違ふ。たとえば僕は疎開を経験してないですからね。

末川 いや、しかし疎開以上に厳しい。

坂野 やっぱりね、あの頃の個人的な経験ですらぶん違ふてくると思いますね。

川本 そりゃ三木清が言うように、基礎経験がその人の人生観なり生き方を決定しますよ。

坂野 にもかかわらずね、個々人のレベルと社会的な集団の場合とで違ってくるんじゃないかな。個人の人生観みたいなどころでは個々人の経験みたいなどころがものすごく大きく関わってくるけど、それにもかかわらず、その時代って言うかな、たとえば終戦っていうのを共通に体験した世代なりグループなりで、共通の行動様式みたいなものが出てくるという点もあるんじゃないですか。

川本 そこのところの基礎経験のちがいですけどね。僕は社会科学やってるけど、集団とか社会とかいうものに対する嫌悪感みたいなものがあるね。一晩で天皇陛下のために死ぬ、から民主主義になったでしょう。国家や社会や集団への不信感があるんだよなあ。妹も含めて天皇陛下のために死んでいった人を沢山見ているから、民主主義にもそんなに素直になれないんだよなあ。91年のソ連解体でマルクス経済学やってた連中困っているでしょう。社会や集団はコロコロ変わるんだなあ。だから、結局ね、最後のところは、自分のことは自分でするしかしょうがないんですよ。

人間が極限状態になった時とる行動はさまざまかも知れないけど、僕の頭に浮かぶのはね、ヤスパースは極限状況を死、苦悩、闘い、負い目の4つに求めたでしょう。ここから僕は、高橋和己の表現を借りると孤立無援の思想、ホッブスのいう「万人の万人に対する闘い」、「人は人に対して狼である」という状況がでてくるように思うんだなあ。大岡昇平さんの『野火』や『レイテ戦記』ね。敗戦と飢餓のなかでの人喰いの話ね。勿論、個人差があって、すべての人がしたわけではない。そして勿論、最も忌むべき、非人道的行為の一つだねえ。しかし、死に直面して生き残るためには、これもしようがないねえ。その時、犠牲になるのは、まず、原住民、それから弱い人間でしょう。この前漂流して助かった船長も、異分子から食べようと他の者が相談していたと言っていたでしょう。僕は神さんはこの世を残酷に造られていると思う。極限状態では人間は異分子や弱い者を殺して喰い、人類の保存を計ってられるように思う。だから、結局人間は個別者として、いかに残酷であっても神と1人で向き合うよりほか仕方ないように思う。ケルケゴールの実存の三段階の最後の宗教的実存ね。神と人間の間、教祖とか宗団が入ると、神と人間の間関係ではなしに、人間と人間の間関係になるね。すると、人間の諸欲望のブツつかり合いになって、極限では殺し合って生存を計ることになる。

長くなって、話とんで申し訳ないけど、これ東洋思想の影響があるんかなあ。天安門事件でアメリカは人道問題で中国を非難したでしょう。しかし、中国5000年の歴史では、政権を保つためには、100万、200万の異分子を殺したってどうということはないのね。ヨーロッパの価値観とは違ったものがあるんだよなあ。『中国の赤い星』とか『偉大なる道—朱徳の生涯—』に描かれたあの長征には、ものすごく感激しましたけどね。うーん、こういうことがありうるのかなっていう。最近、やはり八路軍、大長征っていうのがあんなきれいごとじゃなかったというのがたくさん出てきているでしょう。違いますか。

だから、僕には人間の集団とか、社会には信頼感がもてないんだなあ。勿論一般論として言うつもりは全然ないので、こういう考え方をする人間もいるんだなあ、ということで聞いてもらえばいい。しかし、これも坂野さんの言うように、世代間の考え方を比較すると、戦争体験からきている考え方だから共通点があるのかも知れないけど。どうも長くなって済みません。

### 戦後経済史の流れのなかで

松野 それでは、先生は立命館に着任されてドイツ産業資本主義の研究に入っていられるんですが、その成果が著書『ドイツ産業資本成立史論』に結実します。そのあたりの経過についてお話しただけであればありがたいんですが。

川本 私が本にまとめた論文を書いたのは60年代だけど、敗戦で日本は焼け野原になって、食べるものも着るものもないという状況から出発したわけですね。これはもう理屈じゃなしに、平和でモノが豊かな社会というのを誰もが理想として描いたわけです。われわれも進駐軍がやって来たときにね、いちばんはじめ覚えたのが“exchange”でね。はじめはこっちの切手持ってくと、向こうが缶詰くれおってね。そのうちに向こうもわかってきて、切手じゃくれんようになった（笑）。

とにかく食べるものがないんだもん。だから平和でモノが豊かな社会というのがみんなの理想であり、そこで戦後改革が起きたわけでしょう。その戦後改革の全部の基礎が農地改革ですね。農地改革っていうと、平和と民主主義の社会の建設の基礎であるというのが社会科学の方の理屈だけど、理屈より先に直接には胃袋の問題と結びついてたわけね。ゲーテの『ファウスト』でメフィストフェレスのいう、*Grau, teurer Freund, ist alle Theorie, Und grün des Lebens goldner Baum.*「すべての理論は灰色であり、緑なのは生活の黄金の樹だ」ですよ。ですから当時の経済史、歴史学でも農業の問題がいちばん重要だということになりました。

57年に特研生として立命に入ったんだけど、55年が政治的には55年体制の出発点、経済的には神武景気に始まる高度成長の出発点になるわけです。けれども、57年ていうとまだそんな感じじゃなくて。「もはや戦後は終わった」という56年の経済白書ね、なに言っとんだという感じでした。まだ腹は減ってますしね。

だけどそのあたりで、『歴評』『歴史評論』で吉岡〔昭彦〕さんが、あれは何年だったか忘れちゃいましたが、要するに封建制から資本制への移行、その中でもとくに農業・土地問題に研究者があまりにも集中しすぎていてね、もっと研究者が社会的分業、散らばる必要があるという発言をしました。もはや戦後は終わったんで、農地改革の段階ではない。資本主義そのものが発展していく、そういう段階に力を注ぐべきだ、というふうなことを書かれまして。それがきっかけ

になって、農業・土地問題から資本主義そのものの発展の出発点、工業の出発点としての産業革命研究というのが経済史で流行になったというか、皆そっちへ行ってしまったんですね。そういうところで研究課題を立てますと、また西洋経済史ですから大塚史学には非常に魅力感じてましたので、ドイツにおける産業革命をやり、その心臓がライン=プロイセンであるということで、ここを研究したわけです。

当時末川さんは、ニーダー=シュレージエンの土地制度について、非常にすばらしい処女論文を書かれているんですね。中村幹雄さんがミュラーの大連合内閣の崩壊。世界恐慌下で大蔵大臣がヒルファーディングからモルデンハウアーに替わるわけなんですけど、失業保険問題でミュラーの大連合内閣が崩壊したあと、ブリューニングが出てくる。そしてブリューニング内閣の48条の乱発というのがナチの前史になっていく。そういう意味ではワイマールの終焉を意味する。そういうところを財政問題でね、むしろ経済史の方の問題でやられ、末川さんが、まさに経済史の中心の中心である農業・土地問題をやられてた。野田〔宣雄〕さんだけがシュトレゼマンの対西欧と対東欧の外交史で、私なんかには例外的に思えたんだけど、西洋史の伝統からいけばこっちが正統派でしょう。そこらあたりの京大西洋史の問題意識を末川さんから。

末川 京大の西洋史と十把一絡げにまとめるわけにはいかないんで。あえて言えば野田君なんかの外交史がやはり主流だったかも知れませんが、西洋史のなかでは。

川本 あ、そうですか。

末川 ただ僕たちは大野先生の研究会に出さしてもらい、中村さんも出ていたし僕も出ていました。お宅で月一回、日曜日だったと思います。日曜日の午後から10人ぐらい集まって、だいたい経済の人が主でしたけれど。そこへ山口定さんとかね、中村さんとか僕とか、文学部あるいは法学部の政治学系の人に参加してというふうですね。それが相当長くつづいたんです。

そういう大野先生の研究会の雰囲気というもの、それからいま川本さんがおっしゃった大塚史学、そして直接的には松田史学。まあ大塚史学の流れを汲むとっていいでしょうね、松田智雄さんの『近代の史的構造論』とか。それから林健太郎さん。これは大塚史学からはちょっと離れていると思うけれども、初期の研究はプロイセン改革、農民解放の問題ですね。それらがやはり刺激になってですね、農業変革がどう行なわれるかが各国の近代化のありようを大きく規定していく、そういう問題意識のもとに農業・土地問題が重視されていたと思うんです。

プロイセン改革期については林さんがやっておられるけど、48年革命期〔1848/49年のドイツ革命〕は、あまり農業・土地問題というのは言われてこなかったんで、それでどうなるのかということ調べる意味でね、シュレージエンの農業問題と、それを背景にして起こる農民運動をやったわけです。シュレージエンは封建制がかなり根強く残存している地域だったんですけど、しかもある程度いわゆる本来的農民層、上層の農民層が強い地域でもあり、そういった上層農民層を指導者にする農民運動が展開されていました。最近、川本さんもやられているんですけど、プロイセン国民議会での農業立法にこの運動が影響を与えている、そんなことを調べたんです。

川本さんは、しきりに僕の研究を経済史的とおっしゃるけど、そうでもないんで、やはり政治史との接点というものがかなり強いと思うし、中村さんの研究にしても、ワイマール共和国の崩壊という大問題を、経済的、財政的に、社会保険の掛け金をどうするかというような一見些細な



問題からアプローチしていくということで、経済史と政治史との接点を見いだそうとしておられたように思います。ただ取り上げ方としては、やはり階級史観というか、階級闘争を重視する。で、農民運動なり、あるいは社会民主党系の労働者運動なりの階級闘争的なものが、歴史の原動力となって展開していくという、そういう視点は強かったように思いますね。

川本 その点、逆です。僕にはそういう視点が無い。

末川 そうじゃない。やはり川本さんの初期の研究はそうだと思いますね。三月運動の論じ方なんか。

川本 その点で言いますとね、一つは大塚先生の〔昭和〕13年の『序説』〔『欧州経済史序説』〕ですけどね、その序文にニーチェをもじって、「経済史的、あまりに経済史的」にならないようにしないとイケない、ということが書かれてましてね。私なんかはそこに非常に共鳴しました。

だいたいですね、モノが商品に転化して市場で交換されるようになり、交換過程のなかから交換を媒介する貨幣が生み出されてくると、とくに産業革命以後ですけど、人間の生産したモノが人間から離れ、モノがあたかも自律的に運動するかのような現象が起き、そのモノによってかえって人間が振り回されるという、その結果、ヒトとヒトとの関係がモノとモノとの関係として現われてくる、ここで経済学が成立しますね、いわゆる物神崇拜ね、マルクスの。ヘーゲルの自分でつくり出したものが、自分から離れて今度は自分を支配するという、そういういわゆる疎外ですけど、それが前提になる。経済学っていうのは、そういう人間を離れたモノとモノの関係、需要と供給で物価がどうなり、物価と賃金や利子がどう関係するなどを論じる。そんなばかげた殺風景な学問ができるかっていうね。だから僕は、経済学会に怒られるんじゃないかと思うんだけど（笑）。

大塚先生は初めから、経済学そのものを批判する、近代における経済そのものを批判するのがマルクスの意図だったと言ってますね。モノの自律的運動、市場経済の自律的運動に人間がフリ廻される状態からいかに人間を回復するか、モノとモノとの関係からいかに人間を回復するかが課題であったとね。だからこそ、「経済史的、あまりにも経済史的」な経済だけを見ているのは困るんだ、と。最近のバブル現象は、人間の金銭欲が、市場の自律的運動にフリ廻されて、トクをしたと思ったら、大損をしていたといういい例でしょう。さらに松田先生の影響がありますけど、音楽とか文学とか、経済みたいな殺風景なものに比べて、音楽や文学の方がよっぽど人間的でいいというのが僕にはありましてね。

だけど、60年代はやはりまだモノがない時代ですから。文学部の人でも経済問題に関心を持たざるをえないという飢えた時代だからね。そういう意味では60年代は、経済が人間生活の基礎だということを実感できた時代だったと思います。

だけど70年代以降になると、これはまったく変わっていきましてね、モノが豊かになりすぎちゃって。経済目標を達成したわけで、豊かな社会が一応実現したわけですよ。するとそこから出てくるのは、モノが豊富になるというのがいいのか悪いのかということ。便利なものが出てきたことが、かえって人間生活にマイナスを招くということ。たとえば新幹線ができて、ものすごく生活が忙がしくなったよ。昔はね、8時間ぐらいかけて東京へ行って、一泊ぐらいゆっくりして帰ってきてたんよ。それを日帰り、分刻みでね。あんなものできたから人間生活が忙がしくなる。たしかに便利だけどね。

さらにそういう豊かなモノをつくる際に、資源の問題とか、環境破壊とかいう問題が60年代終わりから出てきましてね。経済目標は達成した、豊かな社会はできた、もう経済の課題は終わった。むしろ経済からもろもろの害悪が出てきたというわけです。それに対してどのように立ち向かうかということですね、それは経済学のなかからはでてこない。経済学を超えた問題になってくる。そこから学際的な問題が提起されてきて、むしろ経済学なんてひっこんどけと。もっと人間的な、政治とか倫理とか文化とか言う問題との接点において、経済を抑え込まんといかんというのが、私は現在の状況だというふうに認識してます。そういう意味では、経済学部なんていうのは早晚立命館から消えていこうと（笑）。経済学会が怒るから反論してよ。

坂野 ちょっといろんな問題がごっちゃになると違うかっていう気がします。学部の卒業パーティーのときに言ったんですが、ケインズがね、1930年代前後に、今は経済問題が大事だけれど、自分の孫の世代になると経済問題なんてのは重要な問題でなくなるやろう、という時論を書いてるんです。文化とか民族とか宗教とかが重要になる、と。表題が「わが孫たちの経済的可能性」だったかな。それにニュアンスとして近いだろうと思うんですね。食うことが非常に大事な問題になってるときには、みんな経済問題に関心を持つけれども、ある程度豊かになるとそうでもなくなる、という言い方を彼はしています。僕はそのうえで、いまだに経済問題解決しとらんよっていう挨拶をしたんです。

食うか食わないかという時代の経済問題と、豊かになったときの経済問題とは、問題は違うけれどもやっぱり経済問題としてあるんだらうと思うんです。川本さんはそれを承知のうえで言ってるんだと思うんですけど、僕なんかは、いつまでたっても経済問題ってのはね、文化とか政治の問題が重要であるのと同じようにずっと重要なかたちで残っていきだらうな、と思うんです。

もちろんこれらの領域は相互に関連していて、バブルのようなかたちで豊かになれば、文化なり政治なりもその影響を受けるというように、相関があるわけですが。川本さんはそれを承知のうえで、どうも経済決定論だけでは面白くないと、やはりそれ以外に人間の活動の豊富な領域があるということを言わんがためにね、わざと経済問題を矮小化するような表現をされているような感じがしてしょうがないんですけどね。

## 闘争と統合

川本 それから、もうひとつ思い出したのは階級問題です。ライン=プロイセンの産業革命をやって得られた結論の一つは、階級闘争というけどね、イギリスとドイツは違いますから。イギリスで書いたエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』を、そのままドイツにあてはめることはできません。ドイツにおいては、工場労働者は48年〔1848年〕では特権階級ですよ。手工業者も、大工業との関係でさまざまです。工業化への起爆が三月前期に行なわれて、繊維工業を中心に産業革命が進展していくわけだけどね、その産業革命に適応できる手工業と、そうでない手工業があって、三月運動で蜂起したりしてるのは、工業化に適応できない手工業者でね。工場労働者は特権階級で、それから適応できる手工業者もブルジョアの側に行きます。ところが階級闘争というのは、要するに工場制での資本と賃労働の関係ですから。だから階級闘争論が適用できるとしても、非常に限られた時期の、限られた状況の国であらうというのが結論です。だから、階級闘争というよりむしろ……。

末川 直接生産者という表現をしておられたと思います。つまり手工業の親方とか職人とかひっくるめて、直接生産者という表現で、その運動ということで論じられる。しかしやはり、直接生産者という表現であれ、その運動に注目しクローズアップされたということは、その時期の研究の特徴ですね。

川本 うん、あれはやはり60年代の時代の特徴ですね。74・75年に松田先生のご厚意で留学してきたんだけど、日本は当時田中角栄の狂乱物価の真っ最中でした。向こうで『ツァイト』[Die Zeit. 西ドイツの週刊新聞]なんか見ると、物価上昇のグラフが出てて、イタリアが一番で日本が二番ですよ。ドイツは0.6%ぐらいの上昇率でね。日本の留学生もたくさんいたけどゾツィアルボームング [社会住宅]なんかに入っていて、外国人でも所得の低い者には非常に安い住宅がありました。もちろん、大学の学費はただだったしね。要するにゾツィアーレ=マルクトヴィルトシャフト [社会的市場経済]ですよ。東の社会主義との対抗で、市場経済の基礎の上で、社会主義以上の経済的に平等な社会を作り上げていく。福祉も手厚い社会をつくり上げていこうとしていたわけです。もちろんガスト=アルバイター [外国人労働者] 問題がくすぶってはいましたけど、ですけどその矛盾もまだあまりなくて。そういう意味では、資本主義の基礎の上で社会主義がめざす以上のものができる、というのが実感だったですね。

そこでさっきの話で言えば、今までは直接生産者とかこっち [下を指す] の側から見てた。しかし、むしろこっち [上を指す] の側の方が大事なんじゃないかと思ったわけです。私はもともと経済政策の豊崎先生のゼミだったから、経済政策というのはあれでしょ、政策主体が政策対象に対して政策目標を達成するためにどういう政策手段でもって働きかけていくか。その時の状況によって政策手段は決まっていきますけどね。以前は政策対象の側から、直接生産者の側から見てたんですね。ところがね、西ドイツの非常に成功したと思われる状況見えますとね、政策主体の方から見る必要を感じたわけです。フィッシャー [ドイツの経済史家] さんから非常に影響を受けたんだけど [W. Fischer, *Wirtschaft und Gesellschaft im Zeitalter der Industrialisierung*, 1972], インテグラツィオン [統合] の問題ね。こっち [下] から見るとコンフリクト、階級闘争になっちゃう。こっち [上] の政策主体から見るとインテグラツィオン、政策主体の政策の立て方。これはなんといっても権力を握ってるわけですから、権力の側の問題が非常に重要だというふうに考えて、そこで方向転換しちゃった。

松野 しかし先生の『産業資本成立史論』でも、上からの改革といいますか、政策の問題、営業の自由だとか、そういったものがやはり産業革命においてかなり大きな役割をはたしたという、そういう論述構成になっていなかったでしょうか。

川本 そうなんですけど、末川さんが指摘されましたように、やはり関心の中心はこっちですわね。直接生産者の方にあったことは事実だと思います。

末川 それが転換していくにあたってですね、やはり西ドイツの学界の影響というものがかなりあるんじゃないですか。つまりコンツェとかコゼレックとか、社会史の先駆になるような人たちがですけども。旧社会から新社会への、あるいは伝統的な身分制から解放された市民社会への移行にあたっては、いろんな分野で国家によるエマンツィパツィオン [解放] が必要だということを、この人たちは強調しましたね。営業の自由だとか、土地所有の自由だとか、そういうのを国家行政の方がリードして、つまりエマンツィパツィオンを促進していくような働きをしていく。

このことによって社会内部の軋轢を緩和しながら、うまく上から新しい社会への移行をはたしていく。で、新しい社会は新しい社会で矛盾をもってくるのだけれども、その矛盾もまた最終的には国家の方がうまく調整し、社会の諸利害も調停していつて治めていくという。ある意味ではドイツ特有の道がそこに現れているかもしれませんが、とらえ方としても国家の主導性をクローズアップする見方、それがコンツェなんかによって打ち出されてきましたね。

川本 末川さんがおっしゃった通りなんです、それを私流に自分の研究に即して言いますとね、私はケルマンさんのところに留学したんだけど、ケルマンさんというのはコンツェのお弟子さんなんです、ゲッティンゲン時代の。

1954年に“Vom ‘Pöbel’ zum ‘Proletariat’” [「〈賤民〉から〈プロレタリアート〉へ」]というコンツェの論文が出ました。身分制社会におけるペーベルというのは、人口の増大を阻止するために身分の外に置かれた結婚の出来ない層なんです。ペーベルは「賤民」とでも訳しますか。深沢七郎が描いた東北のずんむが、日本ではこれにあたるんじゃないですか。家庭内奴隷みたいなもので結婚を許されないんです。これはプロト工業化とも関係するんだけど、農村に問屋制が広がってくると、そのことによって働き口が出てきて、結婚できなかった彼らが結婚できるようになる。家族を養えるようになってね。そういうのを前提にして、さっき末川さんが言われたナポレオンへの敗戦を契機とするエマンツィパツィオン、身分制から解放されると結婚の自由が出てくるわけですね。そこで人口が増大して、ペーベルが身分制から解放されたのが当時におけるプロレタリアートなんです。このプロレタリアートが増大する、解放されたペーベルがプロレタリアートとして増えてくる結果、これに対して工業化の進展が未成熟な結果、いわゆる大衆貧困が生み出されてくる。それが産業革命の進展で工業化がすすむと、工場に吸収されることによってですね、このパウペリスムス [大衆貧困] が解消していくんだと。コンツェのはそういう説なんです。

エンゲルスによると、産業革命というのは資本・賃労働の矛盾を激化させて、階級闘争に導くと言うんだけど、そうじゃなしに産業革命の進展がパウペリスムスを救うんだ、逆なんだ、というわけですね。工業化の進展は大衆の生活を豊かにし、階級闘争の激化ではなしに社会的統合を推進していく。これはDDR [東ドイツ] との実際の経済と福祉の競争のなかから出てきている理論なんで、頭のなかだけの理論じゃないと思うんです。西ドイツの歴史家にとっては、資本主義社会では階級闘争が激化して、社会主義に至るのだという、社会主義理論に対抗する理論を作り上げんといかんわけで、具体的に進行していく福祉を重視した西ドイツの経済、社会的市場経済とマッチしながら研究が進行していく。そういうところから生み出されてきたものだと思うんです。

最近、高橋秀行さんがフィッシャーさんの翻訳を出しましたが、そこでも統合の立場がとられています [ヴォルフラム・フィッシャー『貧者の社会経済史』高橋秀行訳、1993年]。こんなことが一つのきっかけになって、こっちからこっちに替わったことは事実です。エンゲルスの『労働者階級の状態』が出た直後に、ヒルデブランドが書評を書いています。実はその書評のなかで、こういう見地はすでに出てるんです。古いところ言えば、産業革命に対する楽観説と悲観説。悲観説が前面だったのが楽観説が出てきた。僕のはこれ楽観説だからね。だから当時反動だと思われたし、そう言われたこともあるんだけど、まさにそうです (笑)。

山井 今先生がおっしゃったような新しい観点からする研究が、『立命館経済学』に連載されている論文ですね〔「三月前期のプロイセンにおける『社会問題』と社会政策および中間層政策の展開」〕。僕はその最初のあたりのものをちょうど院生の頃に読んでました。先生が扱われたのと同じような対象に関心を持っていたので、「こういう風に書けばいいのか」と思いながら読んで覚えがあります。あれは、当時としてはパウベリスムスを最初に扱ったものですよ。

川本 あのね、藤田〔幸一郎〕氏が扱ったのがちょっと早かったと思うよ。早かったというより、彼はミュンスターにいて、僕はボーフムにいて、何度かドイツで会ったんです。その時彼も、コンツェの論文に非常に注目してたね。僕も注目してて、ただ関心のありようが彼と僕とで違ってたけど、彼もそこからヒントを得てあの秀れた大著ができたんだと思いますよ〔藤田幸一郎『近代ドイツ農村社会経済史』1984年〕。彼のばあい、マルクス=エンゲルスの階級闘争論との対置で、プロレタリアートの本来の闘争の目標は、市民社会における市民権の獲得に向けられていたので、プロレタリアートの「市民社会への同化」により近代市民社会の完成をみるとするコンツェの見解の側面に関心を置いて、あの秀れた大著が生み出された。いわばコンツェのプロレタリアート論の社会的側面に注目しているのに対し、僕の方が経済的側面に関心をもったという違いがあるように思います。

## 近代批判

川本 60年代に学問状況が変わってきて、70年代には研究関心が多様化しますよね。まず60年代から南北問題が出てくるわね、植民地の政治的な独立がどんどん進んで。研究でも南北問題に加えて、産業革命が中心だったのが、独占形成からファシズムの研究、それから社会主義の成立と発展ね。これについては、肥前君、林道義氏、雀部〔幸隆〕氏なんかのミール〔ロシアの伝統的村落共同体〕の性格をめぐる議論が出てきます。それから70年代になると公害問題が出てくるでしょう、60年代の終わりからかな。それでアナルと日常史が出てきますね。ブローデルの自然、経済、政治、『地中海』。それからウォラーステインの世界システム論、ポランニーの市場経済の時間的・空間的限界性の指摘。さらにヴェーバーとハーバーマスなんかの近代批判。むしろ近代が批判されてくるという、そういう状況になってくるわけですよ。

問題関心が非常に多様化してきて、しかしその基礎に近代批判がやはりある。これ知ってる。これ面白いよ。6月24日の『朝日新聞』夕刊のコスロフスキーさんについてで、近代というのは還元主義と進歩主義を二つの柱にしていると言うんですね。ある観点を立ててそこに全部還元する。それから、進歩の問題。ところが多元論的なポストモダンではですね、価値というのはその場限りのものでしかないという相対主義になってくる。さらにそれが進むと、価値そのものに否定的なニヒリズムが出てくると言うんですね。

私なんかは、価値とはその場限りのものでしかないという相対主義の典型でして、だから末川さんが翻訳された本〔イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』1986年〕の後書きに、お互いに立場の違う者が活発に論争しないといけないというように書かれますとね、僕の胸にぐさっと突きささってね。いやなことをぬかしやがると（笑）。僕は、価値とはその場限りのものでしかないという相対主義で。人それぞれの人生だからね、自分の関心のあるテーマで各々がやっていきゃいいんで、なんにも討論なんかせんでもいいと思ってただけ。

で、まあここでの結論は、討論を通じて諸価値の間の有機的連関をつくりだすことが、ポストモダンを克服するために必要であろうというんで、末川さんの考えと結びついていくんですけどもね。僕は、そんなことでかやしないというところで居直ってるんですよ。

70年代のオイルショックを契機に重厚長大から軽薄短小の産業構造に移行し、交通・情報が発展しまして、ハイテクですわね。80年代初めからの半導体、パソコン、オフィス=オートメーション。NC 数値制御装置技術とロボット。光ファイバーとファクシミリ。世界中の、今まで知られてないようなこともどンドン茶の間に入ってきて、今まで知らないようなことがいっぱい出てきてね。それで問題関心が多様化すると、総合なんてとてもできやしないと居直ってるんですけど。

末川 挑発的ですね（笑）。まあ、その価値の多元性というところはまったく同感でね。とくに1989年の大変動以来、社会主義も一つの壮大な実験だったんじゃないか、という感じがするんです。そういうところまで含めて、いろんなシステム、いろんな体制が競合しあっている、それに応じて多様な価値観が並存していくのは当然だろうと思うんですけども、そういうのをしかし相対主義で放っとけというわけにはやはりいかないうような状況が、たとえばユーゴの紛争とかいう問題を見てもあるわけですよ。

今までだったら生産力の発展とか進歩とか、生産力の展開を通じての人間の解放というようなことが、社会科学の認識においても大きなウェイトを占めていたわけですけども、それが、近代を見なおすという流れの中で、科学技術の発展で生産力を伸ばしていった、それでええんか、という問題を突きつけられていると思うんです。そうすると、ちょっと中世へ戻ろうかというような雰囲気まで出てくるわけですし、そういうような状況もまた、多様な価値の並存状態を示していると思います。しかしそれでも、その根っこにある大事な問題を軸にして、多様な価値を持つ者が相互に討論するような場が必要だと、やはり思うんですけどね。

山井 ハーバーマスの問題ですね。ハーバーマスはコミュニケーションという概念を使って、価値は多元的であるけれども、なんとか共通の正義を探そうとする。ロールズの正義論なんか入れながら、それを対話の形で見つけていくというわけですよ。相対的な正義というかな。僕なんかには、一種のドンキホーテかなという気がしないでもない。

末川 ドンキホーテですか。

山井 ドンキホーテはいなければいけないというふうにも思ってるんですよ。

川本 非常に健全です。僕は、坂野さんの西ドイツの留学体験とね、西ドイツについてどういう印象を持ったか、それを通じて今はどういうアプローチを持つのか、それを聞きたいな。

坂野 僕は川本さんより3年あとに行っただですよ、77年から79年の3月まで。

川本 1年半もおったやろ、厚かましいぞ。学部に迷惑かけて。俺は1年しかいらなかった（笑）。

坂野 僕が行ったのは、西ドイツの問題点がもう出て来つつあった時期ですね、僕の専門で言うと、75年の暮れに「財政健全化法」とかいうのが出て、それまでかなり社会福祉等々に支出していたのをカットしていく動きが出てきました。その次の段階が80年代に来ますけどもね。なんと申しますか、赤軍派の動きなんかが強まっていて、社会的な対立の感じがかなりすごかったですね。北欧と並ぶ福祉国家として最先端を行ってるな、というプラスのイメージと、それが行

き詰まりかけてて、というイメージと、両方を持ちました。

川本 さっきの進歩の問題は。

坂野 僕なんかは一種の相対主義なのかもしれんですけどね。一種の経済決定論とも言えるぐらいの、たとえば階級闘争史観みたいな形でやっていくような、あまりにも機械的なものに対して、そうではないいろんなファクターがあるんだよ、という認識が出てくるわけでしょう。それを僕はすいぶん進歩だと思ってるわけですよ、人間の歴史の過程を見ていくうえでね。このようなものの見方と、そして階級闘争論なんかによる歴史のつかみ方のパターンと、人間の認識が歴史の展開過程をより豊富な形でつかんでいくというプロセスを、ジグザグな過程を歩んでいるんだというふうに。まあきわめて楽観的ですよ、僕の理解の仕方は。

歴史法則のような形でつかむという、一つのパターンが崩れただろうと思うんですけども、それで歴史の歩みというもの何かわからず、つかまえどころがなく、何ら一定の決まりなり規則というものがないというようなことではない。20世紀の30年代ぐらいから今までのところで、ロシアを中心にかなり影響力をもった相当機械的な歴史の見方が、事実によってその不十分さを修正されている。一定の時期になると、そういう要素を含めた形でね、より豊富な認識が行われて行くだろうと、きわめて楽観的に見てるんです。

川本 まあ、末川さんと坂野さんがどういうことを言うかは、大体想像がついてる（笑）。坂野さんに聞きたいな。やはり南北問題が出てきて、そちらの方から日本、満州の問題に入られて……。

松野 私の場合、やはりまだ貧困の問題っていうのが、日本は解決したけれども世界では解決していないんじゃないかという、そういう意識がありましたですね。そこからやはり出発しています。69年大学入学ですが、大学紛争の真っ最中に入ってきたわけです。新植民地主義が問題になっていて、経済学部に入ったのも、まず河上肇の『貧乏物語』を読み、それで入ったという世代です。私は1950年生まれですが、和歌山市近郊の非常に貧しい農村に生まれました。そういう自分の貧困の体験もあって、自分自身のところでは解決されたんだけど世界では解決されていない。やはり貧困の問題は経済学の課題であるということで、研究を出発しました。ですから生産力の発展という問題に、経済学の一つの課題があると考えています。

ただし、私が研究に入ったときのことをもう少し言いますと、日本の60年代の末から70年代というのは、社共の統一で新しい革新自治体が拡大した時で、ひょっとしたら新しい民主的な政府ができるんじゃないかという、そういうふうな時期でした。そういうことなかで、日本における社会主義への道というのができるのかな、と。そして日本が変わることによって世界が変わるのではないか、という漠然とした印象を持っていたんです。

しかし先生が言われるように、とくに89年以降の変革のなかで、やはり生産力の上昇だけを目的としたあり方というのは、人類にたいして非常な問題を残したんだということが明らかになったわけです。そういう意味では経済学の役割についても、多面的に見ていく必要がある、という、そういう感じを持つようになっていきます。

坂野 あのね、生産力と進歩の関係って言ったときに、物的な、あるいは技術的な生産能力だけじゃなくて、それをどう社会的に利用するのか、コントロールするのか、管理運営みたいなね、そういうものを含みうるのではないかな、と思うんです。だからそういう意味で、たとえば

公害なりオゾン層を破壊するような形でしか発展させていないというのは、本当の意味で生産力の発展と言えるのかな、という気がしますね。

さっきコンフリクトからインテグレーションへという形で視点を変えられたと言われたんですが、そこのところかね、完全に対立するような視点の変化なのかな、という気がせんでもないですね。たとえばケインズの発想というのは、要するに管理していくという発想ですよ。知的な管理者、エコノミストなり官僚なりが、起こってくる問題を処理していく。大衆っていうのは、あまりそういうことを管理する能力がないというのが、彼の発想の底にあったんだろうと思うんです。それがイギリスみたいなどころから出てきたというのは面白いと思うけれど。

さっき統合の問題を、川本さんはドイツ特有の状況とからめて話されたけど、そうなのかな。要するに現代化してきたときには、フランス革命みたいに体制をひっくり返すというのでなく、インテグレーションの形で矛盾を処理していく能力を人類はかなり身につけていく。こういうことをケインズは出したんだろうと僕は思いますね。そういう点を含めて、僕なんかはわりと進歩主義なんですね。起こってきた問題を処理していく能力みたいなものは、人間つけていくんじゃないかな、みたいな。全くの楽観主義みたいな感じもせんでもないですがね。

末川 「特有の道」って言う場合は、ちょっとマイナスイメージがあるんですね。政府がリードして、行政官僚が社会の諸矛盾を調整して治めていく。その代わりに権威主義的な支配体制がずっと残ってしまう。それがナチズムにつながっていくという形で、マイナスイメージで言われることが多いんです。

最近しかし、西ドイツの社会国家に関わって、たとえばビスマルク時代の「飴と鞭」といわれた社会政策ですね、そういったものが見直されるとか、あるいはローレンツ=フォン=シュタイン [19世紀ドイツの法制学者] のルネサンス、再評価とかいうふうな形で、上からコンフリクトをうまく治めて社会を統合していくという、その力を再評価していこうという、いわばポジティブな方向にとらえていくという動きが出てくるんじゃないですかね。今ケインズについておっしゃったのも、そういうことにつながるんじゃないかと思いますが。

山井 インテグレーションというとらえ方で、代表的なのはパーソンズですね。ただ川本先生がおそらくパーソンズと違うのは、人間というのはどうしてもばらばらで、統合なんて結局できやしないんだということを、原体験のレベルで持ってらっしゃる。たしかに全体としてみれば統合は進んでいくかもしれないけれど、消しようのないコンフリクトの問題が、先生にとっては重いんじゃないかと思うんですけど。

川本 やはり研究の場合、どこに関心を持つかによって史実の組み立てが変わってくると思うんですよ。

## Sonderweg

川本 末川さんが指摘された点、ゾンダーヴェーク [ドイツの「特有の道」] の問題について言いますと、ニッパードが亡くなって、彼を追悼して、彼の“Deutsche Geschichte”についての文章がGG [Geschichte und Gesellschaft. ドイツの学術雑誌, Richard J. Evans, Nipperdeys Neunzehntes Jahrhundert, Eine kritische Auseinandersetzung, GG, 20 Jahrgang / Heft 1, Januar-März 1994, S. 119-139.] に出ましたね。あれ読んでつくづく思ったのは、やはりゾン



ダーヴェークの問題っていうのは、ナチのような、ああいうとてつもないものがなぜ成立してきたのかということに関心を持ってやるから、すべてのことをナチの成立に全部流し込ませて書く。これを、ニッパードイは批判して、各時代には独自の意義と価値がある、と述べてドイツ史を書き始める。しかし、書きすすむうちに、かれの批判した現在の関連から強い影響を受けて、ドイツ・ナショナリズムを、ヨーロッパの基準から偏倚していない、「正常な」ものであると歴史的に正当化し、1991年10月3日の日付けのあとがきで、前年のこの日に生きて出会えた幸福を告白するに至っている、というのです。ところがインテグラツィオンの観点も同じですよ。さっき言ったようにね、DDR [東ドイツ] に対して BRD [西ドイツ] が負けんように、優れてるっていう、そういう現実の冷戦構造の対立の中から出てきてね。それで、西の優位のもとでのドイツの統一ということに関心をもってドイツ史を振り返るとね、ゾンダーヴェークと違った局面が出てこざるをえないわけね。やはり、資本主義の発展というのが社会主義的なやり方よりもずっと有効性が高いんだ、ドイツも西ヨーロッパの一員だ、という観点ですね。インテグラツィオンというのは、要するに社会主義に対する資本主義の対抗のなかから出てきた見地だと思うんです。

僕はもともとゾンダーヴェークの方に興味持ってやってきたんですが、そこにインテグラツィオンを持ってくると、政策主体がどうあるかによってインテグラツィオンの西欧型とドイツ型が打ち出されてくる。そういう問題を、政治構造の問題として私はとらえたわけですけど。普通選挙を基礎にした議会制民主主義という政治構造のうえでインテグラツィオンをする西洋型と、ドイツのように行政や軍隊が立法権よりも優越するような場合、これには社会主義も入ると私は思うんだけど、要するに西洋型でないところでインテグラツィオンをする場合と。これがゾンダーヴェークの問題と結びつくと思うんですが。

私には被爆体験があるから、なんでこんな戦争を起こしたんだというのをドイツの側から見ていこうというゾンダーヴェークの議論と、西を中心にしたドイツ統一という冷戦構造の生み出した観点から出ているインテグラツィオンの発想が、奇妙な形で結びついてると私は思ってるんです。しかし、ゾンダーヴェークとインテグラツィオンの観点は水と油です。ゾンダーヴェークはドイツと西欧の違いを問題にするし、インテグラツィオンは社会主義に対して、西欧とドイツの資本主義の共通した優位性を問題にするわけでしょう。この二つをうまく結び付けようといういろいろ考えているんですが、うまくいくかどうか。それと、それよりこうした問題関心自体がもう過去のものですね。ドイツ統一がなり、新しい問題が噴出し、これと EU の進展が絡むという、冷戦構造解体後の新しい事態のなかから、新しい価値関心に基づく研究が生み出されて、今迄やってきたことについて、いろいろと考えないといけなくなるでしょうね。まあ、万物は流転し、この世の中は、神さんがそんなに人間ごときに分かるようにつくられていませんからね。万物の真相は唯一言にして尽す。曰く不可解。だから、あっちに頭を打ったりこっちに頭を打ったりしながら、がたがたしてってね、どうせうまくいかないにしても、とにかく努力していくのが論文だろうと私は思っています。

それからさっきの松野さんの発言で言えば、先進国と途上国との問題で、先進国の方では近代批判が出てくるけど、途上国の方では市場経済への移行が問題になり、まさに近代化そのものが課題として浮かび上がってきてる。そういう状況のなかで、日本にいて途上国の立場の研究をや

られるというね、そのつなぎみたいなのをどのように考えられているのか、というのが一つ。

それからもう一つお聞きしたいのは、今度金日成が亡くなると中国は喪に服しますわね。私も留学生持って、中国の学生諸君と話しててね。彼ら非常にいいし、本当に楽しかったけれども、市場経済が進展していったら社会主義が崩れるんじゃないか言うと、絶対そういうことはありません、という答えが返ってきましたね。社会主義の政治体制と市場経済いうのは絶対にうまくいくんだということを、留学生は言いますわね。その問題、いわゆる体制間問題ですけど。満州、中国あたりの研究される場合に、政治と経済の問題、それからさっきの近代批判が全面化した先進国と、近代が目標になる途上国の問題ですね。そういったところの整理をどのように考えられているのか、教えてほしい。

松野 私自身の研究ということで言いますと、戦前段階での先進国と後進国の関係、これから何が読み取れるかという、そういう研究で、日本帝国主義批判という視角でやっています。そうした場合に、どうしても植民地化の対象地域の問題を研究しないといけない、日本の側の研究もしないといけない。その両方合わせた形での経済史といいますか、そういうものを目指しているということなんです。そうですね、現在の中国の学生、留学生が意識している社会主義というのは、おそらく経済史でいう社会主義とはかなり違うものと思われまます。

川本 やはり一党独裁っていうか、そこが……。

末川 そこがどうなるか、非常に気になりますね。あれだけ経済的に開放を進めていくと、やはり政治の解放ということが結びついていくんじゃないかと僕なんかは思うんですけどね。

山井 僕の知っている中国からのある留学生は、社会主義を信じてませんでしたね。

末川 その場合の社会主義っていうのは、何を指してるの。

山井 要するに日本と変わらなくなる、というように。中国の現体制についても批判的ですね。中国の政治の現状についてもものすごくベシミスティックで。ただし天安門事件についても否定的ですけどね。

川本 山井さんは坂野さんの後に留学でしょう。留学と、そうだと、進歩について教えてよ。

松野 70年代以降の価値観の多様化、転換のなかで、山井さんは協同組合だとか、そういうところに着目されているわけですけど、それとドイツの統合なんかをどういう視角から考えているのか。そのへんのところを。

山井 一つには、川本先生とか坂野先生とかは世代が違うし、聞いてると松野先生とも年はたいて変わらなけれどやはり違うようだし。

まず、貧困というのが僕には問題にならないんですね。世界の各地で貧困が存在していることは重々承知していますけれども、しかし自分の腹にこたえる問題にならないんです。あるいは先ほど言われたゾンダーヴェーク、「特殊な道」論にしても、ドイツ史やってる者として当然勉強はしていますが、あれも僕の問題にはならない。大学院に入って一年間、ナチスの勉強をしましたが、結局それをテーマにはできませんでした。一つは、すでに膨大な数の研究者が日本にいるということがあります。ただ、それ以上に、日本で軍国主義が席捲してああいう道をたどってしまったということが、知識としてはあるんですが、やはり自分のなかで自分の問題にならない。

数年前、ユルゲン・コッカが日本に来たとき、成田に向かうバスのなかで彼と話したことがあります。彼は1941年生まれですから、ナチの経験はほとんどないわけです。そこで、なぜあなた

はナチスに関心持つんだと聞いたら、彼はたしか、超近代的な手段によって歴史上例を見ないほどの野蛮なことがなされる、そういう事態がなぜ起こったか、それを自分は知りたい、というようなことを言いました。だけど時代はかなり変わっているわけで、あなたはああいう状況がふたたび起こる可能性をどれだけ切迫したものと考えているのか、と聞くと、あまりないだろうと答えました。

ナチス、あるいはゾンダーヴェークという問題の立て方自体、ドイツの学界のなかでかなり比重が低くなっていると僕は認識しています。ゾンダーヴェーク論についてコッカがあちこちで発言していますが、彼はいつも、先進西ヨーロッパ諸国のなかで、なぜドイツだけにあのような事態が起こったか、そういう問題設定からする場合にかぎった議論なんだと言いますね。別の問題設定をすれば、ゾンダーヴェーク論にはならない。ヴェーラーだったらそう簡単にはいかないだろうと思うんです。ヴェーラーはヒトラー=ユーゲントに属していたわけで。少し世代が下のコッカだから、こういうことも言えるんだと思います。さらにもっと後の世代になると、コッカからもずれてきますね。日本の戦時経済研究でも最近そうですけど、ナチスの支配下でどれほど戦後社会の基盤がすえられたか、という連続性が問題になってます。ナチスをやるとして、こういう問題の立て方だったら共感できるように思います。

僕は学園紛争は知らないんです。高校に入ったときに名残があったくらいで。自分としてはショックを受けたけれど、それでも本当に腹にこたえる体験にはなっていないように思います。今の学生とはこれまた世代が違いますけど、言ってみれば原体験の貧しさという点で共通してるんじゃないかな。ただこれは、近代それ自体の問題だと思うんです。フランクフルト学派が提起して、ハーバーマスが引き継いでいる問題。大衆社会化して、個人がアトム化し希薄になる。それぞれ人間は個人であるという意識を持ってはいるんだけど、実際には「個」ではなくなっている。

こういう状況認識のなかで、以前あったようなヨーロッパと日本の比較、日本の前近代性というような問題は僕にはなくなってしまうんです。問題は近代です。豊かな社会であって、豊かであるがゆえの問題を抱えた社会。そのなかでのどうしようもない空虚感というところから、僕は出発するしかないんじゃないかと思います。

留学について言えば、僕が留学してたのは85年から88年ですけど、最初にドイツに入ったときには全然違和感がなかったですね。どうも日本と変わらない社会でつまらんな、と。ただ、だんだん過ごしてくると、なんていやな社会だと思うようになりました。もちろんお世話になった人はたくさんいますし、とくにユルゲン・コッカにはどれだけ世話になったか。あそこで初めて勉強したような気がします。だから感謝のしようがないくらいなんですけど、近代の一つの行き着く先をドイツ社会に見たような気がしました。もうなんというかバラバラで、家族も解体状態で。まさにフランクフルト学派が描き出した世界を見るような思いでした。日本があそこに行くんだったら行かない方がいい。もちろん市民運動は盛んで、それは感心すべきところではあるんですが。

ただもう一つ、日本に帰ってきて、日本人はなんて変わった人間なんだろうとは思いました。『おかあさんといっしょ』という幼児番組を見て不気味な感じがしました。ああいうのは西ドイツではありませんね。子どもがたくさん集まって、先生の指導にしたがって動くわけでしょう。

上手にできたらいい子で、できなければこれはまた可愛い子だと。日本ではああいうのが、本当に生まれたときからやられるわけでしょう。個人の消滅という近代の問題が日本にも当然あるわけですが、それが生まれたときからの集団教育というかたちで、実に徹底的に進められていく。集団のなかで無個性化して、で、その上で強烈な序列のなかに押し込められる。

坂野先生なんかとちがって、僕は楽観的にはなれないんですよ。ドイツの協同組合のことを研究したわけですけど、そこに何か光明があるなんてこと、全然信じられない。あれは失敗の歴史です。官僚制が支配するなかで、結局勝ち目はない。もっとも人間の歴史なんて、結局失敗の積み重ねでしかないって意識もあります。丸山真男さんが、ヴェーバーを引きながら言いますね。勝つ見込みのない合理化と官僚化に対して、そうと知りながら抵抗するのが現代の英雄なんだ、と。協同組合も、そういう抵抗の一つとしてとらえようとしたんです。

松野 でも山井先生は、今でも生協運動に少しは関心を持っているのではないのでしょうか。

山井 ただあれはもう、いかにも巨大組織でしょう。僕が直接取り上げた19世紀の労働者の生産協同組合というのが、いま日本でもやられています。もう何十年かの歴史を積み重ね、本当に苦しい営みを続けておられるわけです。本当に敬意を払ってるんですが、ただし今でも赤字ストレスのところが多いんですよ。そこで最近、いろんなところに連帯を広げようとして、組織的にかなり大きなネットワークをつくらうとしています。文化活動であるとか、福祉活動であるとか。本当に立派だと思んですけど、同時にそれによって巨大組織化してくるわけですね。とくに生協という大きな、言ってみればすでに官僚組織化したところとくつつくことによる危険というのを、僕は感じてます。展望を持つためにそういうところと結びつこうとするのは当然のことだと思うけど、それによって、結局官僚制の網の目のなかに入っていくことになるんじゃないか。それを打ち破れる糸口は、僕には見えてない。

## 展 望

松野 それではまた川本先生に戻って、70年代以降の歴史的経験や日本社会の変化だとか、世界的な変動のもとで、先生は研究を進められてきているわけです。「三月前期のプロイセンにおける『社会問題』と社会政策および中間層政策の展開」という論文ですが。この論稿について、もう少し執筆の意図だとか、執筆の過程で生じてきたいろんな考え方だとかについてお話ししていただければ。

川本 まあ簡単に言いますと、それまで産業資本、資本中心でやってきて、次をどうするかというんで、賃労働だとか土地所有だということ考えてたんですけど、土地所有は末川さんがあんなものを書かれてるし、うるさい奴がようけあってね、大月〔誠〕とか。土地所有やっただがた突っつかれたら、こりゃもうかなわんなというのがあって、それとまあ、もう農業の時代でもないだろうというのがあってですね。でまあ、賃労働の方に、賃労働といってもマルクス経済学的に厳密な賃労働じゃないけど、労働者の側に行こうということになりました。それから、やはり経済政策のゼミ出身ですから、政策面でとらえるということになりますと、社会政策。ドイツの場合、社会政策としてはまず工場労働者保護の問題があるけど、工場労働者だけではとどまらない手工業者保護問題があって、それが中間層政策で、そっちの方に視点を移したわけです。こう移したにあたっては、さっき言ったインテグレーションの問題があります。

それから長編になった理由は簡単でしてね。特研生の試験でドイツ語がどうも満点だったらしいんだね。これがまたおかしな話で、あの頃は試験問題は全部タイプで打っていて、ミスプリがいっぱいあったんですよ。それで、重大なミスプリがあったわけよ。“oder”の最後の“er”をね、間違ってもう一回打ちちゃったわけだな。ところが“er”はね、これ主語でしょ。こいつが入るとわからんわけよ。それでだいぶ考えてね、間違っただけで打ったとしか思えないという結論に達してやね、それを書いた。そしたら満点になった（笑）。

その時のドイツ語の出題者が淡川〔康一〕さんでね、その淡川さん、その後目をかけてくれてね、本ができたときに持ってたんだよな。そしたら、これ論文集か書き下ろしか言われたから、僕困っちゃって、とっさに論文集ですよ言うたらね、論文集なんか本じゃない言うんだな。書き下ろしでない駄目だって言う。そこでね、それなら今度は書き下ろし書かんといかんかなと思ってね、書き下ろしということになると連載になりますわね。それでやりだしたんです。

それでまず、工場労働者保護ということでやりますと、これはアントンの研究〔G. K. Anton, *Geschichte der preußischen Fabrikgesetzgebung bis zur Aufnahme der Reichsgewerbeordnung*, 1891〕があるんですね。古典なんです。つぎつぎに本が出ますけど、結局最初の古典に依拠して、ちょっとバラエティ富ましてるだけだっという感じを受けているんですけど。で、アントンを基礎にしました。この当時は繊維工業が中心で、その婦人・児童労働保護を出発点にしてプロイセンの社会政策が出てくるわけです。それをやって中間層政策のところへ移ろう思ったところで、82年かな、教学部長とか何とかおかしなもんが舞い込んできた〔1982年から84年まで教学部長〕。運が悪いんだよな（笑）。

それで中断しまして、僕はあまり器用でないから研究を放りました。坂本〔和一〕君みたいに僕は行かんのだな。あれはすごいですね、ほんと。本をどんどん書きながら教学部長や副学長をやるでしょう。ああはいかんですよ。で、うっちゃったんだ。そして帰ってきたら、何やってたんか全然分からなくなってね。面白い論文があるというて一生懸命ノートとって読んで、ノートひっくり返したら前に読んでるんだな。そんなことがありましてね。

それですとね、だいぶ手間を取ったんですけども中間層政策に入りました。これについてはレールの定評のある研究があります〔H. Roehl, *Beiträge zur preußischen Handwerkerpolitik vom Allgemeinen Landrecht bis zur Allgemeinen Gewerbeordnung von 1845, 1900*〕。これは、工場労働者政策についてのアントンに匹敵する本で、それに新しいものをくっつけながらね。

中間層政策の場合には、政策主体である国家、プロイセンの政府の立場が非常に問題になってきましたね。やはりドイツのように革命的断絶のない国にあってはですね、中間層というのは温存して、社会的基盤として保守化の方向に利用するというのがプロイセンの手工業者政策の一貫した方針になりますので、そのことを明らかにしようと思うと政治の問題をやらざるをえない。それで政治構造の方に入っていったんですよ。ただこれはまったくの素人でしてね。80年代後半に入りますともう定年間近でね。ご臨終だからねえ。ご臨終ならやっぱしよう、今後の研究は気の向くままですね、時代の変化とともに浮上してくる新しい問題に対してね、脇道にも入りながら続けていこうというわけです。それでまあ私としては、終えるつもりはありません。未完成の遺稿として葬り去るということで、今やってんですけど。

ですけど、まあとにかく政策主体が問題になってくるわけですが、政策主体といっても政策を

担う人間の問題ということになってきますとですね、遠藤周作さんの『女』なんか読んで、あれ非常におもしろい。ああいう権力をめぐる人間の浅はかさ、愚かさ、というものが書ければいいんだけど、人間を直接扱うのはどうも苦手です。そういう点じゃあ、坂野さんより俺、社会科学のなんだ（笑）。やっぱり人そのものじゃなしに、しょうがないから政治構造とか政治の仕組みの方を中心に国家をとらえていきたいと思ってるわけです。

さっき言った選挙権の問題と議会制民主主義が一つ。ドイツはゾンダーヴェークですね。西ヨーロッパは議会制民主主義で、ドイツはそうでないところから、中間層、保守的基盤としてこれを組み込むというインテグラツィオンの問題。これがナチにつながりますね。で、やってみたら、どうしても三十年戦争 [1618-48年] からやらんとしょうがないということになりまして、シュモラーがあるでしょう [Gustav von Schmoller, Das brandenburgisch-preußische Innungswesen von 1640 bis 1800, hauptsächlich der Reform unter Friedrich Wilhelm I, 1898]。三十年戦争からナチまで。いま軍隊をやっています。軍隊の通史みたいなのを書いたりしてね、気の向くままに自由にやっています。

でまあ、目下「三月革命と官僚および軍隊」を執筆中で、500枚ぐらいになるんじゃないかな、半べらで。自分の墓標は自分で立てる、というふうにしてんですけどね。もうすぐ死ぬるしねえ（笑）。だからまあ、今までやってきたよりも大きな視野ですね、とくに国際化が進んでくると、今まではもう縦割りですね、日本なら日本の歴史でぼつぼつやってりゃいいというわけにはいなくなる。いまあれでしょう、網野 [善彦] さんの研究にしたって国際間の問題になるでしょう。で、国際関係というものを理解しようと思うと、遡らざるをえんわけね。たとえばユーゴ問題一つにしてもね、人類の発生くらいからずーっといかんととらえられないような時代になっていますからね。三月革命をやってるけど、そこだけでは取まらない。まあ勝手なことを言える年代にもなったしね。三十年戦争のこと書いたりナチ書いたりね、それから社会主義にまで言及したり、ということやってるんです。

社会主義について言えば、ナチも、社会主義も、絶対主義も、まあ全体主義という点では同じだと私はとらえています。それには86・87年の東ベルリンへの留学 [フンボルト大学交換教授] が大きいな。東ドイツにいたとき、日本人でね、ツォー [西ベルリンの一角] に行くときと乞食なんかたくさんいるけど、東にはそういうものがなくて非常に清潔でいいって言う社会主義礼賛者もいました。日本人です。人によって考え方や印象は異なるし、その人その人でそれぞれに正しいというのが私の立場ですけどね、ただ私としては、西ドイツの生活との比較で非常に悪い印象が強かったですね。

ユンカー-インストロイテ [19世紀ドイツの領主-農村労働者] 関係が社会主義的ユンカーと社会主義的インストロイテに拡大した、というのが私の結論です。社会主義的ユンカーというのは、ホーネッカーとそれを取り巻くノーマンクラトゥーラですね。社会主義的インストロイテというのは大衆なんですけど、体制に忠実であるかぎりにおいてですね、貧しくてもとにかく物質的には保障される。これはユンカー経営がそうですわね。ユンカーに忠実である限りにおいて、いかに貧しくても飢える心配はない。そして統治の形態は、フリードリヒ大王と同じだと思いました。「大王の官房からの極端に独裁的な指導と、スパイと情報提供者を拡大することによる王自身の最高の統率力と行政機構の管理」。これはハンス・ローゼンベルクの言葉ですけど、これと

社会主義社会は同じだと思いましたね。シュタージ [秘密警察] がたくさんいてね。私の講義にもシュタージがちゃんとついていました。北朝鮮の本が出たでしょう。『北朝鮮 秘密集会の夜—留学生が明かす素顔の祖国—』。李英和という人の本が出ましたね。あれと同じです。もちろん思想信条の一片の自由もなかったですね。19世紀末にユンカー経営から農場労働者が自由を求めて西のルール工業地帯に移住していき、ロイテノート [人手不足] が生じますね。西に行けば自由はあるかも知れないが、ユンカー経営のばあいと異って失業の危機があり、食べる保障が失われるにもかかわらずです。

これと同じ現象がDDRとBRDの間にもあった。東から西へ移住したい人が後を絶たず、一定の手つづきと審査が必要で、東の財産を失うのですが、僕のDDR滞在中知り得た限りでも相当数あった。そしてレストランで食事する時などでロイテノートの深刻さを痛感しました。それがゴルバチョフのペレストロイカの後、ハンガリーを経て大量現象となり、ベルリンの壁の崩壊の原因の一つになったのは周知の通りです。「人はパンのみにて生きるに非ず」で、ヴェーバーのいうように、人間は物質的な経済的安定とともに、ばあいによっては「自由か死か」に示されるように経済的安定以上に精神的な自由を求めるものだとの認識が欠如しているところに社会主義の最大の欠陥があったように思います。何かDDRというのはフリードリッヒ大王時代のドイツや19世紀末のドイツとよく似ているとの印象が強かったですね。党のお偉方とのベツィーウンク [縁故やコネ] があれば何でもできる。そういう意味では社会主義というのは、これはもう広い意味においてですね、プロイセンの絶対主義と変わらない。そういう感じをわたしは受けました。

まあ、私はやはり、人間は自分の基礎経験で生きるよりしょうがないと思うんですね。だから自分の基礎経験中心に生き、そして死んだらいいと思うんです。いくら時代遅れだと言われようがアホと言われようが、俺はこれでもって生きてきたんだし、これで死んでいくというね。それでまあ、いろいろと新しいテーマが出てきますが、それで、次考えてますのは、この論文終わったらあれ行こうと思ってます。ポーゼン州のポーランド人問題とシュレスヴィヒ=ホルシュタインのドイツ人問題。それからオーストリーのチロルの問題ですね。要するにアインハイト・ウント・フライハイト [統一と自由。ドイツ三月革命の基本問題の一つ] のアインハイトの問題。

末川 ナショナリズムですね。

川本 ええ。ドイツ統一のナショナルの規定ですね。これは民族問題と関連してるんで。そこでは国際情勢が問題になりますね、一つ。

で、三月革命については、国際情勢の変化ですね、それから軍隊の出方が三月革命で決定的な意味をもっている、というのが今のところの結論です。ブルジョアジーが裏切ったとか、プロレタリアートのこのやり方がまずかったとか、そんなちやちな問題じゃなしにね。軍隊をどっちがつかむかということと、国際情勢の変化ですね。大体ドイツで革命が起きたこと自体が、パリの二月革命やオーストリアの三月革命をきっかけにしていたわけでしょう。それで、パリの6月と、ウィーンの10月の反革命。これがドイツにとっても決定的で、それと軍隊ですね。歴史をつくるのはおんな子どもじゃなしにゲバルト [暴力] である、というのが私の結論です (笑)。

## 立命館

松野 だいぶ時間もたちましたが、立命館大学について、そして若い世代の人たちに対して何かご発言がありましたら。

川本 この前、岡崎栄松さんと話していたとき、岡崎さんも言っていたけど、やはり立命館にきた一番の魅力は末川〔博〕先生だったです。その魅力の中心は何かというと、これは人によって違うだろうけれど、僕のばあいは末川先生の人生訓ね。やはり教育の現場は清潔でないといけないっていうね、だから裏口入学とかそういうことは一切やらんのだ、と。僕は学生時代に民法の講義を聞きましたけどね、学問と相撲取りは同じなんだ、ふんどし一丁で土俵にあがってね、力の強い者が勝つんだと。教育の場も清潔でないといかん、ということを言われました。それからやはり僕は、立命の伝統には質実剛健ということがあると思う。シンプルライフね。だから、クーラーなんかとっばらえって言ってるんでね（笑）。やはりね、シンプルライフ、質実剛健で、かつては虚礼廃止で年賀状のやりとりはやめましょうというんで、年賀状は出さなかったですよ、お互いに。いつのまにか出すようになってしまいましたけどね。

それから末川先生に、一日三分説というのがあります。一日8時間働く、8時間は自分の好きなことをやる、8時間は寝る。人生も三分説だ、と言うわけです。最初は社会や親にお世話になり、次は社会に働いてお返しして、家庭をもって子どもを育てていく。あとの25年は勝手にやるというね。そういうようなことがたくさんありました。三惚れとかね。鈍根運。民法の講義なんか殆んどやってないよ。物権、債権、親族、相続を覚えておけばよって（笑）。立命館に来てそういう話がありましてね、やはり末川先生のもすごい魅力というのが、立命に今日まで勤めた原動力になっていると思います。

ですけどねえ。僕は68年の学園紛争のとき補導主事をやらされていてね。滅茶苦茶にされたという印象が強いんだよなあ。4半世紀も前のことだけどねえ。学園紛争だから、大学のあり方が問題になり、大きな影響をもったことは事実だけど、左翼内部の権力闘争が大学の場を借りて展開されたという側面もあってねえ。戦時中のように反体制派が少数の時は、異質な者まで団結していかなければやっていけない。しかし、戦後解放されて組織が大きくなってくると、かならず割れる。それが学園紛争となったと思っています。その後、何か思想信条の自由が束縛されているような雰囲気が残ってね。そこへの引っかかりが絶えずあった。その後の経過と冷戦構造の解体で事態は大きく変化してきたけど、僕には学園紛争の経験が何か長く尾を引いて残っていてね。何か立命館と肌が合わないというか、相性が悪いというか、そういう感情が残っていて、非常にアンビバレントな気持です。ところが末川先生の質実剛健がだんだん薄れてきて、冷房まで入るようになるね、やはりやめる頃じゃないのかな（笑）。どうです末川さん、冷房を入れるのはけしからんでしょ、地球環境を破壊してね。

若い世代に何か、ということだけど。要するに、私は自分の孤独な人生を自分の責任で生きていくよりほかしょうがないんで、学生諸君が自分の人生を自分で生きていったらいいし、また放つといってもそうなる。しかし、人生にはいろいろな側面があって、もちろん社会のなかで生きていくわけですから、人々の間での調和を大事にせんといかんというのはね、その通りだけどね。それはやはり自分のことがきっちりできて、そのうえで、人々との調和を考えることが大事な



と違うかな。ただ、末川先生の影響だと思うけれども、われわれが若い頃から立命の学生は明るくて、真面目だとの評判が高かった。今でも就職懇談会で企業の人の話を聞くと、とても評判がよい。冷戦構造が解体し、東西のイデオロギー対立が解消し、世界史は第二次大戦後に匹敵する激動期に入った。先行きは不透明で、今まで考えられなかったような新しい問題も噴出している。立命館は戦後一貫して時代の要請を先取りして、それに応える教育と研究を充実させる努力をしてきた。現在学園は発展しているし、これからも発展していくと信じています。学生諸君も立命館大学の学生であることに誇りをもって、上を向いて、社会に出たら新しい時代を切り開くために働いて下さい。そして絶えず母校の発展を見守りながら、母校の発展のために寄附をして欲しい。発展のためにはカネがいるんです。最後に経済学部らしい発言になったかなあ。これが募金委員をした者の最後のお願いです。

まあ、もういいよ。そろそろやめようや（笑）。

**松野** 川本先生は、自分の墓標は自分で立てるということをおっしゃったんですが、最近の論稿では日本の天皇制の問題から宗教のあり方まで幅広く発言されていらっしゃいます。これからの論文でも縦横無尽にお書きいただいて、さらに定年退職ということですが、今後もわれわれに対していろいろなところで、大学でもご自宅でもご意見をお願いしたいということを希望しまして、この会は終わりにしたいと思います。本当に皆さんありがとうございました。

（1994年7月22日 末川記念会館にて）